

時代を受け継いで愛されるお米

石下西中

三年

梅澤

花怜

「白米」は、私の唯一の好物であり、なくてはならないものだ。私はこの十五年の間、お米には本当に沢山助けもらった。お米の絶妙な美味しさは勿論、愛しく思えるのは、私だけだろうか。米離れしつつある現代、また、今は「個」の時代とも言われ、今や何にでも手に入る事で、ファストフードで済まし、大切なはずの人と人とのつながりや、感謝の気持ちや薄れゆく中、食育を通して、私達日本人の主食の「米」に、皆でもっと関心を持たねばならないと思う。

私が生まれ育つのは、四方に広がる川と温暖な気候に恵まれる、豊かな風土の茨城県常総市で、田園風景が四季折々の姿に変わる、とても魅力的な街である。関東一の米どころに住み、毎日の食卓に欠かせない、美味しいご飯。特に、ツヤ・コシ・粘りの三拍子が揃う「コシヒカリ」のご飯は、絶品である。噛

めば噛む程、口の中で甘味が膨らみ、冷めても美味しい。そんなご飯が、私達の食卓に運ばれるまでには、奇跡の様な沢山の道のりをつながりがあるから、「お米の奇跡」とでも言えるのだと思う。夏の猛暑や台風、稲刈には厳しい長雨。宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」が、まさしくお米を詠んでいるかの様だ。そんなお米であるからこそ、人間の身体と心の忍耐を強化する、底力パワーがあるのである。

私の家では、なぜかこだわりがあり、一膳

目は素の炊きたての白米を、ホクホクアツアツを食べ、二膳目からはおかずを共に、二度の美味しさを味わう事となっている。そして、お米に宿る神様へ、必ず手を合わせ、「いただきます！」
「ごちそうさま！」
家族口を揃えて合唱する。「米」という字は、八十八回の手間がかかっている、と言われている。「八十八」の文字から「米」という文字が出来た。だから一粒も粗末にしては

いけない、という事を會祖父からよく聞かされていた。

私は今、音楽への道へ進む目標の進学の為に、週二回、車で五十分かかる教室に、九十分ずつのレッスンに通っているが、私にとって車の移動時間も大切な時間である。仮眠もするが、なぜか私のお腹は腹持ちが悪く、すぐお腹が減る。

「お腹減った!!」

と、口癖の様に私が言う為、母は車の中でもすぐ食べられる様にと、おにぎりを毎回持参してくれる。梅干し・ツナ・シヤケ・昆布・かつお節をまぶしたもの・混ぜご飯・時には赤飯：と白米の七変化の様に、様々なおにぎりを作ってくれる。特に赤飯は「レッスンが上手くできまます様に：〜と、祈りを込めながら、願いも込めているそうだ。

一年三百六十五日、食卓にはご飯がある。お米は無量大である。炊いてそのまま食べるだけでも、日本人には幸せを感じるものだ。

特に私はその一人だ。ご飯とのりとみそ汁の組み合わせは、私の中で格別である。

「食べること」は、生命の源であり、生きていく上で欠かす事のできないものだ。食材が出来る自然に、食事を作ってくれる人達に感謝の気持ち忘れてはいけないものだ。家族が健康で笑顔でいられるのは、神様が宿るお米のお陰だと思う。祖父が末期ガンで闘病し命が危険だった時、祖母が涙しながら必死に祈りを込めて作り、祖父に食べさせた、ほ

んの一口のご飯が、奇跡を起こし、今では祖父の病気はほぼ完治。お米の神様、祖父の病気を治してくれて有難う！私がアレルギーでご飯以外のものが食べられない時、助けてくれて有難う！これまで成長させてくれて有難う！

「いただきます」という言葉に込めた気持ち、時代を受け継いで、家族で食卓を囲む大切さ、そして、日本のお米を更に深めていけたら、きっと素晴らしいと思う。